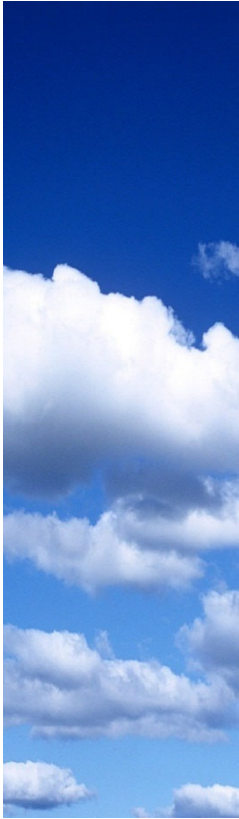


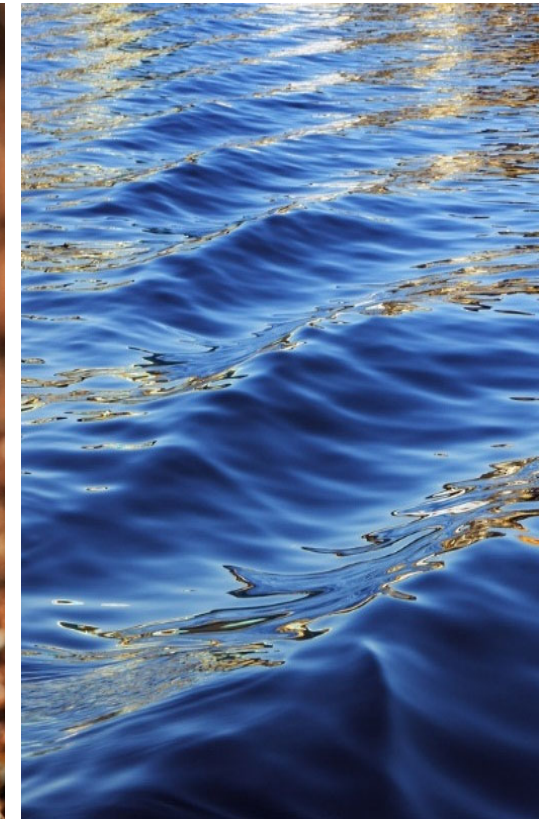
織りなす成長、未来へ
オカノ株式会社

資料 6



衣料リサイクル
の取り組みに
ついて

現状と課題



『繊維産業のサステナビリティに関する検討会』資料

2021年4月9日 於：経済産業省

目次

1. 弊社ご紹介
2. 衣類リサイクルの主な流れ
3. 衣類リサイクルの特徴
4. 中古衣料市場の動向
5. ウェス/反毛市場の動向
6. 「リサイクル率20%」はどこから？
7. 衣類リサイクル推進の課題

1.弊社ご紹介

- 会社名：ナカノ株式会社
- 創業：1934年（昭和9年）故繊維問屋として横浜で創業
- 事業内容：故繊維回収・加工・販売、産業副資材および安全衛生用品卸
- 従業員：国内100名、海外160名
- 拠点：国内7営業所、2工場、海外2工場

【ナカノ株式会社HP】



2.衣類リサイクルの主な流れ

- ・衣類は、住民が廃棄したものが集団回収/行政回収を通じて回収される。
- ・アパレルの余剰在庫や企業の制服などが回収されるのではない。
- ・用途は、中古衣料、ウエス、反毛に大別され、内7割程度は中古衣料としてのリユースであると推定される。



※回収、選別、各種製造、販売、サプライチェーンの各段階で分業化されているという特徴がある。

3.衣類リサイクルの特徴

・ウエス、反毛という例外を除けば、衣類リサイクルの他の資源物との違いは、他の資源物が一次原料であるのに対して、衣類だけは「**ファッション**」であるという点である。この違いは衣類リサイクルを理解する上で、極めて重要である。

ファッションである = 一次原料と比べ圧倒的に需要が小さい

【回収時の特徴】

- 濡れ、汚れ、破れ不可
- 多品種かつランダムな構成 (需給バランスが難しい)
- 品質に地域差がある (全国同じではない)
 - 都会のものが好まれる
 - 気候差
 - 年齢層
 - 回収コスト

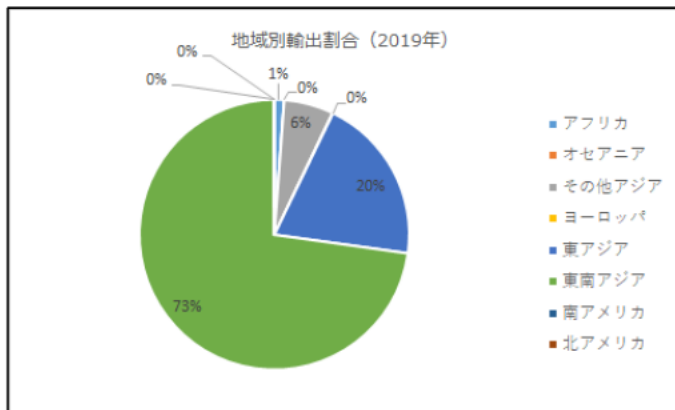
【市場の特徴】

- 低所得層～中所得層 (貧困層ではない)
- 新品衣料と同じ市場
 - ファッション性の高いものが良い
 - 熱帯中心 (下記、体型/輸送コストの制約条件による)
 - 若年層が多い
(例：平均年齢：カンボジア25.6歳/日本：47.7歳)
 - 体型 (体型が近くないと着られない)
 - 輸送コスト (遠くまで輸送するほどの付加価値がない)

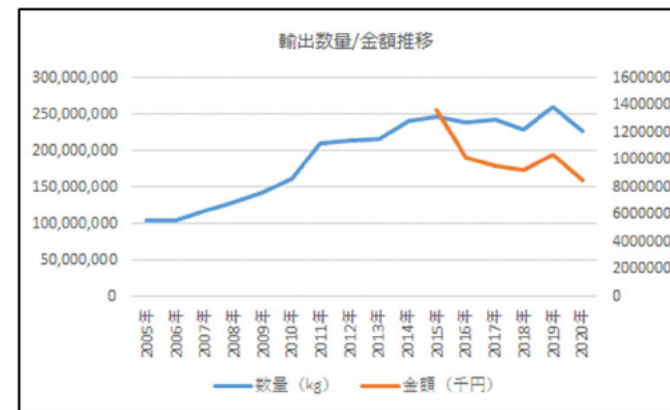
4.中古衣料市場の動向

- ・中古衣料の市場は、パキスタン以東の東/東南アジアで99%を占める。
- ・市場が同地域に集中する要因は、体型、輸送コスト、他の輸出国との競合などによる。
- ・しかし、同地域の人口の82%（32億人）は輸入禁止国もしくは事実上の輸入禁止国に属している。

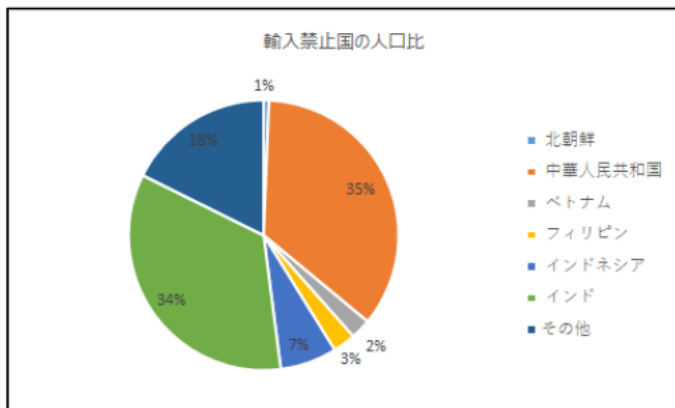
【99%が東アジア】



【輸出量横ばい、価格下落】



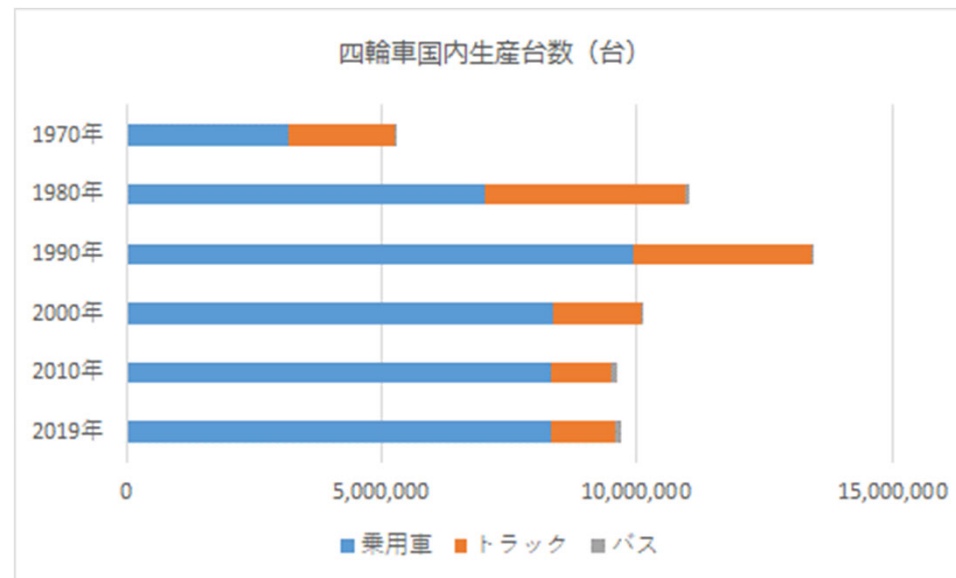
【域内人口の82%が輸入禁止国】



※輸出量は2006年から2014年にかけて大きく伸びたが、それ以降は横ばい。輸出金額は2015年をピークに大きく下落している。現在市場は低価格の停滞期にあると言える。

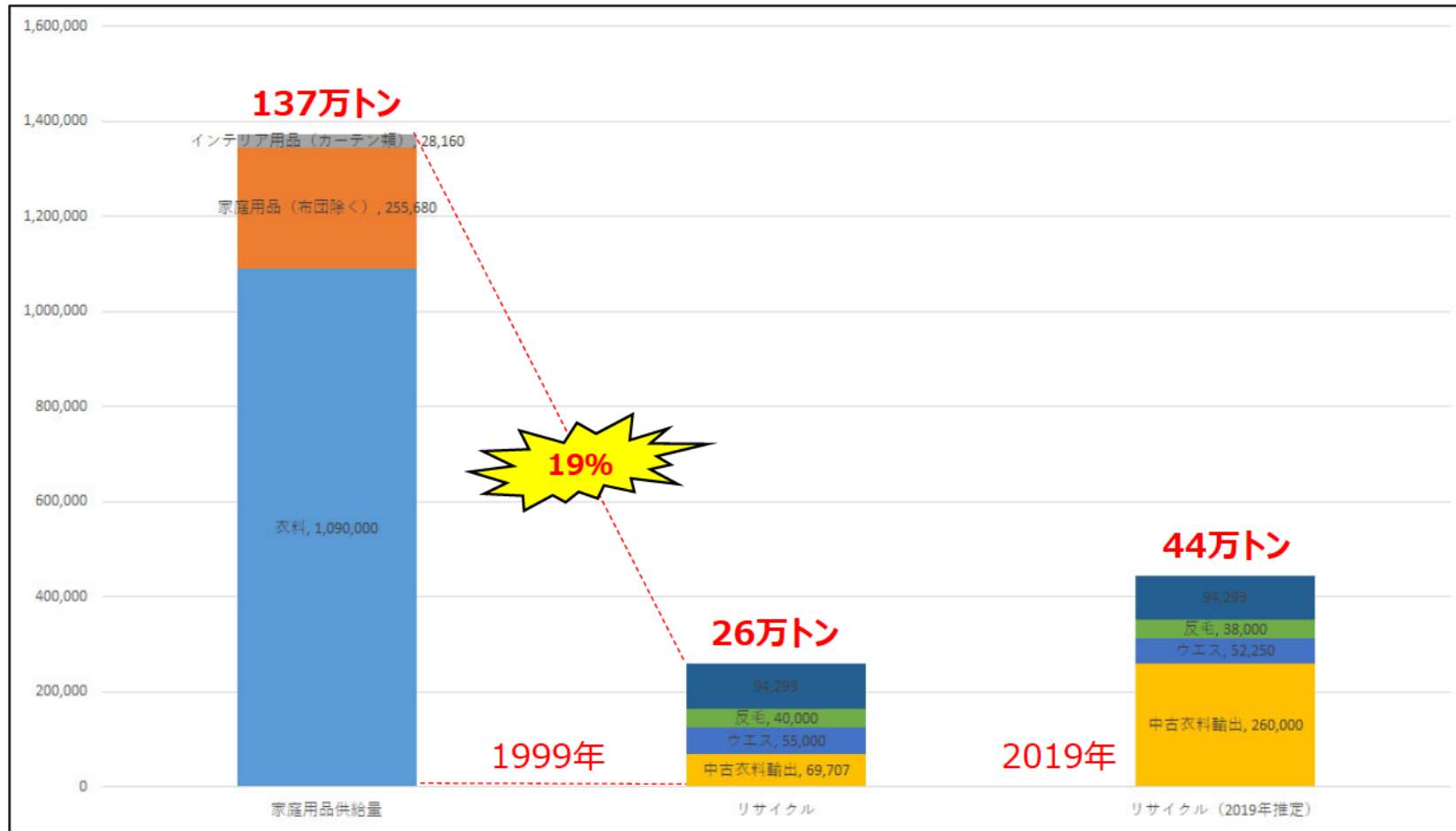
5. ウェス/反毛市場の動向

- ウェスと反毛の主な使用先は自動車産業（重工業）である。
- したがって、需要の増減も主として自動車の国内生産の増減に依存する。
- 国内の自動車生産数は、この20年で5%ほど減少している。実感としても、生産する業者数は減少しているものの、消費量は横ばいなのではないかと思われる。



6.「リサイクル率20%」はどこから？

- 他の資源物（古紙79%、鉄65%、プラスチック84%）と比べ、衣類のリサイクル率は低い（20%）と言われてきた。
- しかし、その根拠となったデータの分母は供給量であって、消費量ではない。
- 別の調査では、衣類の消費量は供給量の半分であるとも言われている。



出典：経済産業省委託調査『平成13年度繊維産業活性化対策調査』（但し、2019年データは筆者による推計値）

7.衣類リサイクル推進の課題(1/2)

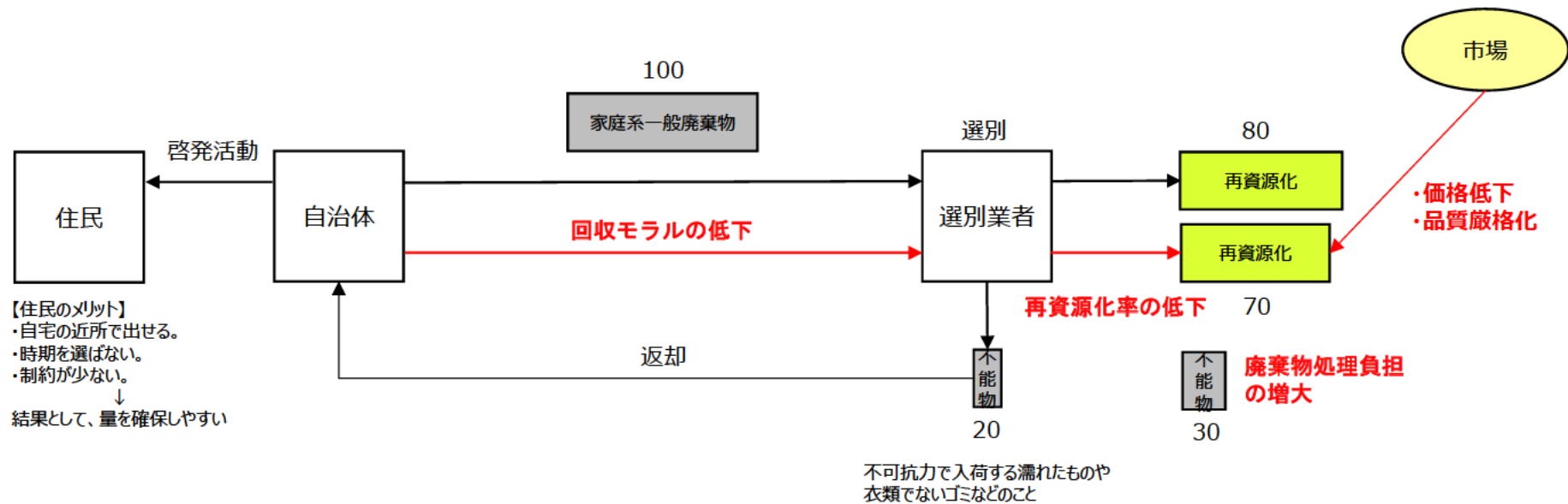
- ・前頁までで分かるように、リサイクル推進の課題は供給不足（回収がすまない）にあるのではない。
- ・前述の三大用途は、恐らく現在も最大のリサイクルの受け皿であるが、他にも多様な用途のオプションが共存すべきである
- ・しかし、量的・経済的に課題である場合も多い。



7.衣類リサイクル推進の課題(2/2)

- ・前述の制約条件を考えると、市中回収は現状考え得る最も合理的、現実的な回収方法である。
- ・しかし、回収量の拡大に伴い、回収モラルの低下から受け手のコスト負担が増大している。
- ・市場環境が厳しさを増す中、競争力を保ち、リサイクルの仕組みを持続可能なものとするため、かつてあったセイフティーネットの再構築が課題であるとする。

かつてあった持続可能な市中回収の仕組み



※返却方式（上限つき）は自治体の家庭系一般廃棄物処理負担を増やす仕組みではない。むしろ、本来100ある処理負担を20ないし30に減らし、市場変動に対し堅牢、持続可能なものとする仕組みである。

※一方、事業者の側にも、有価で購入している回収衣類をむやみに不能物化する誘因はない。



ご清聴ありがとうございました
ナカノ株式会社

